

第二章 倫理觀の相剋

第一節 佛教的ハタリナリズム

と王者の自省

書紀や統紀あるいは萬葉などの古代文獻に
 は、佛教の典籍を下敷きにした章句や、典籍
 の字句によつて潤色された表現が目立つ。このこ

とんらの

とは、古代文献の編者やその編纂事業を後押しした為政者たちが、儒教から大きな影響を受けていたことを示唆している。

儒教は、民に恵みを実施しその生活を保障することと、王者の基本的な責務と看做す政治観と伴っている。すなわち、儒教には、すぐれた

(仁政が可能ならしめる不可欠の条件)

君主による仁政を理想とし、かつ、その仁政の根本として、民を以て常産あらしめ彼らの辛

さを軽減することのうちに見出す考え方が内含されていれる。このような政治観は、人民に慈

恵を施す存在としての君主の^{（在り様）}重視する政治観であり、いわ
 は慈恵主義（パタリナリズム）的政治観であ
 ると言えよう。

儒教的政治観は、日本古代の為政者たるの
 受容するところとなり、実際の政治の場面にも適用
 された。

仁徳天皇が皇后を諫したことはとして書紀
 が伝える一文（仁徳紀十年四月一日条）には、

其れ天の君を立つるは、是れ百姓の為に
 なり。然れば君は百姓を以て本とす。

と
い
う
一
節
が
見
え
る
。
ま
た
、
神
皇
三
（
七
二
六
）
年

六
月
十
四
日
に
発
せ
ら
れ
た
聖
武
天
皇
の
詔
に
は
、

夫
れ
百
姓
或
は
痼
病
に
染
沈
し
て
、
年
を
経
て

未
だ
愈
え
ず
。
或
は
亦
た
重
病
を
得
て
、
昼
夜

辛た苦むむ。
朕
は
父
母
を
リ
。
何
ぞ
憐あ愍はままざら

む
（
統
紀
神
皇
三
年
六
月
十
四
日
条
）

と
あ
る
。
あ
る
い
は
、
ま
た
、
天
平
宝
字
二
（
七
五
八
）

年
一
月
五
日
の
孝
謙
天
皇
の
詔
の
中
に
は
、

朕
庸
虚
を
以
て
、
忝
く
も
大
位
を
承
く
。
區
宇

に
母
と
し
臨
み
、
黎
元
を
子
と
し
育
ふ
。
……

続紀天平宝字二年正月五日条)

とある。

正史が伝えるこれの言辞を見れば、古代

国家の為政者たすは、すくなくとも表面的に

は、父母たる君主の責務は子たる人民を養ひ

その安寧を図ることにあるとする、儒教的なパ

ターナリズムならしは民本主義を標榜していふと考

えられる。

儒教的政治観は、仁政と自然の良好な運行

悪政と天災と結びつけて理解する思考を内言

してゐる。それゆゑ、儒教的政治観は、時と

天子等による

して、人民の困窮の責任を君主に求める考え

を生ま出すことがある。古代の天皇は、

この考えに基づいて、しばしば自省のことは

を發した。

たとえは、文武天皇は、慶雲二（七〇五）年四

月三日の詔の中で、こゝう語つてゐる。

朕菲薄の躬を以て、王公の上に託す。徳

上天を感かし、仁黎庶に及ぶこと能はず。

遂に陰陽錯謬し、水旱時を失ひ、年穀登みず。

すナ、民に粟多(色)からしむ。此れを念ふ毎

た心に慟さく悼たうせり。………(統紀慶雲二年

四月三日条)

また、元正天皇は、養老六(七二二)年七月七日
の詔の中で次のように述べられている。

陰陽錯謬して、災旱頻りに臻れり。是れ

に由りて名山に奉幣し、神祇に奠祭す。

甘雨未だ降らず、黎元業を失せり。朕が

薄徳此れを致せるか。………(統紀養老

六年七月七日条)

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|----|---|----|---|----|---|
| 為 | 儒 | 放 | が | 動 | い | と | 態 | 倫 | さ |
| 政 | 教 | 棄 | 、 | い | は | こ | は | 理 | せ |
| 者 | 的 | し | 場 | た | 起 | こ | 起 | 観 | て |
| た | 的 | た | 合 | た | こ | り | こ | が | い |
| ら | パ | こ | に | 。こ | の | え | リ | 、 | た |
| は | タ | と | よ | の | こ | な | え | 実 | と |
| 、 | ー | を | っ | こ | と | か | な | 際 | す |
| 幸 | ナ | 意 | て | は | は | っ | か | に | れ |
| 福 | リ | 味 | は | 、 | は | た | た | 、 | ば |
| 主 | ズ | し | 儒 | 古 | 、 | で | あ | そ | 、 |
| 義 | ム | て | 教 | 代 | 古 | あ | る | こ | で |
| 的 | を | い | 的 | 国 | 代 | う | さ | は | は |
| 倫 | 放 | る | パ | 家 | 国 | 。う | れ | 、 | 幸 |
| 理 | 棄 | 。 | タ | の | 家 | | る | 一 | 福 |
| 観 | す | | ー | 為 | の | | よ | 政治 | 主 |
| と | る | | ナ | 政 | 政 | | う | の | 義 |
| は | と | | リ | 者 | 治 | | な | は | 的 |
| 別 | き | | ズ | を | は | | 事 | | |
| 種 | 、 | | ム | を | 、 | | | | |
| の | | | を | | | | | | |

政治の力によつて

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 二 | そ | い | こ | は | し | 観 | に | し | 倫 |
| 点 | れ | だ | は | 、 | た | に | 依 | つ | 理 |
| さ | に | に | 、 | こ | 倫 | 依 | 拠 | つ | 観 |
| 追 | 考 | 生 | 以 | の | 理 | た | の | 幸 | を |
| 究 | 察 | じ | 下 | よ | 観 | た | で | 福 | 政 |
| し | を | た | 、 | う | と | の | あ | 主 | 治 |
| て | 加 | た | 正 | な | 幸 | あ | ら | 義 | の |
| み | え | 思 | 史 | 形 | 福 | ア | は | 的 | 表 |
| た | る | 想 | の | の | 主 | ウ | い | 倫 | 面 |
| い | こ | 的 | 中 | 葛 | 義 | か | っ | 理 | に |
| 。 | と | 確 | か | 藤 | 的 | 。 | た | 観 | 押 |
| | を | 執 | ら | が | 倫 | ま | い | と | し |
| | 通 | の | 、 | 生 | 理 | た | い | 真 | 立 |
| | し | 一 | 為 | じ | 観 | 、 | こ | 向 | て |
| | て | 例 | 政 | た | と | 彼 | の | か | 、 |
| | 、 | を | 者 | の | の | ら | よ | ら | そ |
| | こ | と | 相 | あ | あ | が | う | 対 | れ |
| | れ | ソ | 互 | か | い | 依 | な | 立 | に |
| | ご | あ | の | 。 | た | 拠 | 倫 | し | 依 |
| | の | が | あ | 本 | に | 理 | 理 | た | 拠 |
| | | 、 | あ | 著 | | | | | |

第二節 中納言三輪高市麻呂の諫言

持統六(六九二)年二月十一日、持統天皇は

諸官に詔を發し、三月三日を以て伊勢行幸を行

うことと宣告した。書紀によれば、同年二月

十九日、時の中納言直大式三輪朝臣高市麻呂

は、表をより敢然として直言し、天皇の、伊

勢に幸すむとして、農時 をりほびのとき 妨げたまふことと

諫め争められたといふ。

しかし、女帝はこ水を聞きいれず、三月三

日、広瀬王^{よき}行幸の折の留守官^にに任じた。

同日、三輪高市麻呂は、官職を投げうって再

度の諫争に及んだ。書紀は、この日の高市麻

呂の言動にフリエ次のように記している。

是に、中納言大三輪朝臣高市麻呂、其の

冠位を脱きて、朝^{アサ}に撃^{ウツ}上げて、重ねて諫

めて曰さく、「農作^{ノリノホム}の節^{ノミ}、車駕^{クルマ}、未だ以て

勤^{ツメ}きをたまふべからずとまうす。(持統大

六年三月三日条)

二度目の諫言も、女帝の耳を傾けるところ

とほなすなかつた。女帝は、諫言を振りきって、

同月六日、行幸の途についた。

書紀が同月二十九日条に、

近江・美濃・尾張・参河・遠江等の国の

供奉ツクノコトニツクヘマフれる騎士ウマノリビトの戸ヘ、及び諸国クニノミの苜モ丁チヨウ・行宮ウツリヤ

造れる丁の今年の調役エツマを免マフす。

と記して、ニケツの行幸のためには、ニケツの広範な

地域の住民が使役に駆り出されたことは疑え

ない。したがって、ニケツの行幸は、かなり大規模な

ものであつたと推断しうる。

大規模な行幸は、行幸地およびその周辺諸

国の農民に多大な負担を負わせ、（いいては、）彼の農作

活動を阻害する。高市麻呂の諫争についで記

（こゝにまつたがりがあはる）

す書紀の記事は、彼がそうした事態の出来（しつた）を

懸念していたことを伝えている。

日本書紀上巻の第二十五段（「忠臣、欲

しくなく、足るを知らず、諸天に感せられ、報を

得て、奇事を示す縁」と題された段）には、

高市麻呂は、（かきりのわかほし）旱災の時、己が田の口を塞

がしめて、水を百姓の田に施した、と記さ
 れていいる。彼が実際にそのような行動を
 たかぞうか定かではなけれども、靈異記の
 この挿話が、彼の基本的な政治姿勢を明確に
 伝ええていいることだけは否定できないうに
 思われる。すなわち、高市麻呂の持統女帝に
 対する諫争は、（これを意味する）衆庶の生活と保護する
 ことに重きを置く。パターナリズム（ないしは民本思想）
 に基づくものにはほかならないうに、
 そろしたばかりナリズムを信条とする彼の政

の言動は、幸福主義的倫理観を表明するものの
 っ、書紀に記された、諫争の際の高市麻呂
 運行を重視する思考に根ざしている。したが
 明らかに、衆庶の日常生活の正常かつ良好な
 儒教的パターンナリズムを貫こうという姿勢は、
 いう政治^{（漢）}勢は、幸福主義的倫理観に適合する。
 まなわち、儒教的パターンナリズムを貫こうと
 諫争に際して高市麻呂が示した政治姿勢、
 される。
 治姿勢の的確に表現しているように見受け
 明確かつ

| | | | | | | | | | |
|---------------------|-----------------|---|----------------------|------------------------|---|---|----------------------|----------------------|----------------------|
| 高市麻呂は、おそらく孤立無援の状態であ | なフ反()ものゝ推察しうる。 | 紀や懐風藻あるいは萬葉集 <small>西宮回要記など</small> に記されること | に、その折の言動が後々まで語り継がれ、書 | そかな其感を博していた(其感を博した)がゆえ | 彼の思想は、同時代の官僚 <small>貴族</small> たるのあいだでひ | 人だのは高市麻呂 <small>(たて)</small> ひとりであつたにしまも、 | いる点なごを勘案するに、実際に諫争に及ん | らに高市麻呂の諫争に言及する一文を掲げて | 容とは無関係であるにもかかわらず、ことさ |
|---------------------|-----------------|---|----------------------|------------------------|---|---|----------------------|----------------------|----------------------|

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|----|---|---|---|---|---|---|
| 想 | 例 | う | は | | で | ニ | 暗 | は | と |
| 像 | が | 高 | 暗 | こ | は | ヤ | 黙 | 、 | 対 |
| で | 何 | 市 | 黙 | の | な | ス | の | 同 | 峙 |
| き | う | 麻 | の | よ | か | エ | 了 | 時 | し |
| な | 論 | 呂 | 了 | う | っ | 代 | 解 | 代 | て |
| い | 理 | の | 解 | に | た | 弁 | を | の | た |
| 。 | を | 諫 | に | 、 | か | づ | 背 | 貴 | わ |
| 女 | 持 | 言 | よ | 貴 | と | る | 果 | 族 | け |
| 帝 | ち | を | っ | 族 | 考 | 形 | に | ・ | で |
| の | あ | 退 | 支 | ・ | え | で | し | 官 | は |
| 例 | わ | け | え | 官 | う | 女 | て | 僚 | な |
| に | せ | る | さ | 僚 | れ | 帝 | 、 | た | か |
| は | て | に | れ | た | る | に | し | さ | っ |
| 、 | い | き | て | の | 。 | 翻 | か | の | た |
| 諫 | な | っ | い | 其 | | 意 | も | 其 | の |
| 言 | か | て | いた | 感 | | を | 彼 | 感 | あ |
| を | っ | 、 | であ | も | | 促 | の | な | る |
| 退 | た | 女 | あ | し | | し | の | い | う |
| け | と | 帝 | 了 | く | | た | コ | し | 。 |
| な | は | の | 了 | | | の | | は | 彼 |

明確な

物の

物数の

自分の主張を以て

ければならぬ政治^的理由と、それを退けるこ
 とを正当化する論理があつたに相違ない。女
 帝はいつたいいいかなる政治的理由のもとに高
 市麻呂の諫言を退け、あえて行幸を強行した
 のであらうか。また、その際、女帝はどのよう
 な論理に立っていらしたのであるうか。筆者には、
 これらの点を追究することは、日本の古代国
 家の中で^一ニ、その倫理観がせめき合う様子を浮
 き彫りにするこゝに、ながつてゆくように思
 われる。

第三節 女帝の側の論理

既述のごとく、高市麻呂の諫言を退けた持統天皇は、三月六日に行幸の途にワれた。還幸は同月二十日。十五日間にも及ぶ行幸であつた。その間の女帝の行動にワいて、書紀は次のように記している。

壬午〔十七日〕に、過ぎますかみのこほり神郡〔度会・多気兩郡〕、及び伊賀・伊勢・志摩の国造

この記事は、女帝が、伊勢方面の諸国に大い
 に恩恵を施したことを伝えられている。女帝は
 たい何を意図して、このように盛大に恩恵
 を施したのであろうか。
 持統朝においは、元明朝に至るまでの三
 代（十六年間）の皇都藤原京が造営される。造
 営期間は、持統四年から同八年までの四年間（5）
 に及ぶ。二官八省の官衙が整備されるまで
 には、さきに数年を要したであろう。造営事
 業は、律令国家の中枢にふさわしい大規模な

の豪族や庶民

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| か | こ | ひ | 重 | け | 同 | | て | た | 都 |
| つ | こ | い | な | っ | 同 | 規 | の | と | 城 |
| 円 | こ | い | な | し | 同 | 模 | 大 | と | を |
| 滑 | に | て | 負 | て | 地 | が | 事 | 考 | 構 |
| に | も | は | 担 | 軽 | 域 | 社 | 業 | え | え |
| 推 | つ | は | は | い | の | 大 | で | よ | よ |
| 進 | な | 、 | 、 | も | 豪 | で | あ | う | う |
| し | が | 造 | 皇 | の | 族 | あ | っ | と | い |
| て | リ | 営 | 空 | で | ・ | る | た | い | う |
| ゆ | カ | 事 | ・ | は | 農 | だ | け | う | 意 |
| く | ね | 業 | 朝 | な | 民 | に | に | 意 | 図 |
| た | な | そ | 廷 | か | 層 | 、 | 違 | の | の |
| め | い | の | へ | っ | に | 幾 | い | も | と |
| に | 。 | の | の | た | 課 | 内 | な | と | に |
| は | 造 | に | 怨 | で | せ | お | り | 推 | 進 |
| 、 | 営 | 破 | 嗟 | あ | ら | よ | | さ | れ |
| 朝 | 事 | 綻 | と | ろ | う | び | | | |
| 廷 | 業 | を | ま | 。 | 過 | そ | | | |
| は | を | き | み | | | の | | | |
| 、 | 強 | た | 出 | | | | | | |
| | 力 | す | し | | | | | | |

怨嗟を對じこめるための対策を講

じなけれはなすなかつたに相違ない。持統女

帝は、そうした対策の一環として、行幸の折

諸国の豪族や庶民に恩恵を施したのではな

、たろうか。

ただし、女帝は、たゞ単に恩恵を施したに

まに見受けられる

けではなかつた。行幸の目的地伊勢であつた

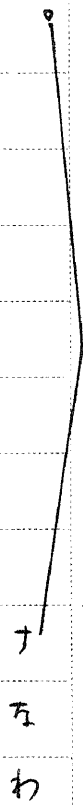
恩恵を施すこと

点から推察するに、女帝とその一行は、伊勢

大神宮の梅威を背景に、皇室・朝廷の勢威を

誇示していらたと考えられる。

| | | | | | | | | | |
|---|--|---|---|--|--|---|--|---|--|
| な 推 定 が 可 能 に な る | た 強 行 し た 女 帝 の 意 図 に つ い て は 、 次 の よ う | 本 節 の 以 上 の 考 察 を 総 合 す れ ば 、 伊 勢 行 幸 | 古 代 政 治 史 の 研 究 に 「 七 一 ペ ー ジ 参 照 」。 | に も 波 及 し た こ と で あ ら う （ 北 山 茂 夫 の 日 本 | の 戸 へ 地 方 豪 族 ） を 通 じ て 、 近 江 以 東 の 諸 国 | る 。 伊 勢 行 幸 の 影 響 は 、 こ れ ら の 騎 士 た ら | れ る 騎 士 の 戸 へ の 「 今 年 の 調 役 」 を 免 じ て い | が 参 照 ） に よ ら ば 、 女 帝 は 近 江 以 東 の 諸 国 の 「 使 奉 | 持 統 紀 六 年 三 月 二 十 九 日 条 （ 本 稿 八 七 六 ペ ー |
|---|--|---|---|--|--|---|--|---|--|



| | | | | | | | | | |
|---|---|----|--------------------------------------|--|--|--|--|--|--|
| 大規模な 行幸を行 うことは 、 農作に 妨げ 農 | 三輪高市麻呂が女帝への諫言において云々 <small>（しんやうに）</small> 農繁期に | る。 | 幸を強行し たのでは なかつた か、と考 えられ | 上しよ うとい う意図 のせよ に、女 帝は伊 勢行 | 造宮事業 への不 平・不 満の顕 在化を 未然に 防 | 諸国に まで派 及させ ること を通し て、藤 原京 | に恩恵 を施し 、かつ、 その恩 威を近 江以東 の | して皇室 ・朝廷 の勢威 を誇示 すると ともに 彼 | ち、伊勢 ・伊賀 ・志摩 などの 豪族や 庶民に 対 |
|---|---|----|--------------------------------------|--|--|--|--|--|--|

ように見受けられる。
 ところが、持統六年の伊勢行幸に際して、
 女帝は、自身の行動が農作に対して与える悪
 しき影響^を黙視する態度をとってゐる。このこと
 は、女帝が、目下の急務は、諸国の豪族およ
 び庶民を皇室・朝廷の勢威の前に服せしめ、
 それによつて、新都造営といつて一世代の事
 業を円滑ならしめることとであり、そのために
 は多少の犠牲が出るのもやむをえない。と
 う論理に基づいて行動したことを示唆してゐ

| | | | | | | | | | |
|-----|----|----|---|---|----|---|---|---|----|
| 一方、 | に | る。 | 出 | 天 | て | 事 | さ | 女 | る。 |
| 行 | 適 | 女 | す | 皇 | い | に | 高 | 帝 | |
| 幸 | 合 | 帝 | 倫 | ・ | る。 | も | め | の | |
| を | し | の | 理 | 皇 | 。本 | ま | 、 | こ | |
| 阻 | て | 論 | 観 | 室 | 稿 | し | か | の | |
| 止 | い | 理 | の | ・ | の | て | ッ | 論 | |
| し | る。 | は | 根 | 朝 | 言 | 重 | そ | 理 | |
| よ | | 、 | 底 | 廷 | う | 要 | れ | は | |
| う | | 明 | に | へ | 政 | 視 | を | 天 | |
| と | | ら | 存 | の | 治 | す | 誇 | 皇 | |
| し | | か | す | 忠 | 的 | る | 示 | ・ | |
| た | | に | る | 誠 | 倫 | こ | す | 皇 | |
| 三 | | 、 | の | に | 理 | こ | る | 室 | |
| 輪 | | 政 | も | 至 | 観 | と | こ | ・ | |
| 高 | | 治 | こ | 上 | 、 | と | と | 朝 | |
| 市 | | 的 | の | の | す | を | 、 | 廷 | |
| 麻 | | 倫 | 思 | 価 | 万 | 他 | 何 | の | |
| | | 理 | 考 | を | あ | の | 何 | 権 | |
| | | 観 | で | 見 | ろ、 | | | 威 | |
| | | | あ | | | | | | |

言の論理は、前節で摘摘した如く、幸福主義
 的倫理観を基調とするものであつた。したが
 つて、伊勢行幸の是非をめぐる持統と高市麻
 呂の確執は、つまるるところ、政治的倫理観と幸
 福主義的倫理観の相剋にほかならなかつたと
 言えよう。

第四節 政治的倫理觀と幸福主義

的倫理觀の相剋

藤原の宮の役民の作る歌

やすみしし 我が大君 高照すす 日の

御子 荒^{あふ}栲^{たへ}の 藤原が上に 食^をす国を

見^めしたまはむと みあさかは 高知すす

むと 神ながさ 思ほすなへに 天^{あめ}地^{つち}も

寄りてあれこそ 石^{いし}走る 近江の国の

| | | | | | | | | | |
|--------------------|----------------------|---------------------|----------------------|---------------------|----|---------------------|----|---------------------|---------------------|
| 沂 <small>の</small> | 真木 | き亀 | 国は | 門に | もの | 御民 <small>み</small> | なす | び | 衣手 <small>こ</small> |
| ヲ | の | も | は | に | の | 民 <small>たみ</small> | す | え | 手の |
| ら | つ | | | | | も | | | の |
| む | ま | 新代 <small>あ</small> | 常世 <small>とこ</small> | 知 | 水 | 家 | 浮 | もの | 田上 <small>た</small> |
| | で | と | に | ら | に | 志 | か | の | 山 <small>かみ</small> |
| い | え | 泉 | な | ぬ | 浮 | れ | べ | の | 山の |
| そ | | の | ら | 国 | き | | 流 | の | |
| ほ | 百足 <small>もも</small> | 川 | む | 寄 | 居 | 身 | せ | | 真木 |
| く | た | に | | し | る | も | | ハ | さ |
| 見 | ら | | 図負 <small>あ</small> | 巨勢 <small>こ</small> | 我 | た | そ | 十 | く |
| れ | す | 持 | 入 | 道 <small>せ</small> | が | な | え | 宇 | |
| ば | す | さ | る | 上 | 作 | 知 | 取 | 治 | 川 |
| | す | 越 | | リ | る | ら | る | 川 | に |
| 神 | 筏 <small>いかだ</small> | せる | く | 我 | 日 | す | と | | 櫓 <small>い</small> |
| か | に | | す | が | の | す | | 玉 <small>たま</small> | の |
| ら | 作 | | し | | 御 | す | 騒 | 藻 <small>も</small> | つ |
| に | り | | | | | す | く | | ま |
| あ | | | | | | 鴨 | | | |

ざし（萬葉集卷一、五〇）
 この、藤原の宮の役民の作る歌（以下「役
 民の歌」と略記）は、第一篇第三章第五節に
 おいて指摘したように、実際に労役に従事し
 た役民の作ではなく、持統朝の一官僚の作で
 あると考えられる。
 この歌の作者は、家忘れ身もたな知らず
 に、つなわち、家郷をもちが身さもかえりみ
 ず、一心不乱に労役に従事する「御民」の姿
 を描き出すことに主眼を置いている。一首の

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|--------------|---|---|---|---|---|---|
| 幸 | る | は | 、 役民の歌の作者 | 皇 | 作 | 御 | え | 的 | 主 |
| 福 | よ | 、 | | （ | 者 | 民 | よ | 献 | 要 |
| 主 | う | 三 | 皇 | は | に | う | 身 | な | な |
| 義 | に | 輪 | 室 | 、 | と | 。 | を | ま | ま |
| 的 | 見 | 高 | ・ | 藤 | し | た | 美 | 4 | 1 |
| 倫 | え | 市 | 朝 | 原 | 、 | が | 徳 | 1 | 7 |
| 理 | る | 麻 | 廷 | の | こ | 、 | と | は | は |
| 観 | 。 | 呂 | ） | 宮 | の | こ | し | 、 | 天 |
| に | す | と | の | の | 造 | の | て | 皇 | （ |
| 立 | す | 対 | 威 | 造 | 営 | 業 | 称 | 皇 | 皇 |
| 脚 | な | 蹠 | 光 | 事 | 業 | の | 揚 | 室 | ・ |
| し | わ | 的 | の | 業 | の | ま | す | ・ | 朝 |
| て | ち | な | み | の | ち | ち | る | ） | 廷 |
| い | 、 | 立 | を | み | に | に | こ | へ | の |
| る | 三 | 場 | 見 | 出 | 、 | さ | と | の | 没 |
| の | 輪 | に | 出 | し | た | れ | に | あ | 我 |
| に | 高 | 立 | て | り | な | い | あ | る | |
| 対 | 市 | っ | り | | | | と | | |
| し | 麻 | て | | | | | 言 | | |
| て | 呂 | い | | | | | | | |
| 、 | が | | | | | | | | |

| | | | | | | | | | |
|-----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|---------------------|--------------------|-------------------------------------|
| 貴族・官僚としての標準とする倫理観に關して | 節参照)を勸案するならば、持統朝のころの | がさかんに鼓吹・宣揚されたこと(前章第六 | こと、および、持統朝のころに政治的倫理観 | な共感を得ていったものと考えられる。この | 持統朝の貴族・官僚たちのあいだで、ひそか | 福主義的倫理観に基づく高市麻呂の言動は、 | 本章第二節で考察したところによれば、幸 | 立場に立って見るように見受けられる。 | 「 ⁷³ 役民の歌」の作者は、政治的倫理観を信奉 |
|-----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|---------------------|--------------------|-------------------------------------|

| | | | | | | | | | |
|---|----|---|---|---|----|---|---|---|----|
| も | 政治 | な | | は | 政治 | 在 | 如 | 考 | ニ |
| し | 治 | い | し | は | 治 | し | く | え | フ |
| 3 | 的 | 。 | か | な | 的 | 、 | 幸 | ら | の |
| 々 | 倫 | 幸 | し | か | 倫 | も | 福 | れ | タ |
| れ | 理 | 福 | な | た | 理 | う | 主 | る | イ |
| と | 観 | 主 | が | か | 観 | 一 | 義 | 。 | 7° |
| 種 | を | 義 | ら | 、 | と | 方 | 的 | す | に |
| 極 | 否 | 的 | 、 | と | 偏 | に | 倫 | な | わ |
| 的 | 定 | 倫 | こ | 推 | 重 | 、 | 理 | わ | か |
| に | し | 理 | の | 測 | す | 、 | 観 | ち | れ |
| 奉 | て | 観 | 推 | し | る | 役 | に | 、 | て |
| い | い | を | 測 | う | 人 | 民 | 重 | 一 | い |
| た | た | 重 | は | る | 々 | の | き | 方 | た |
| と | わ | 視 | 、 | 。 | が | 致 | を | に | の |
| 考 | け | つ | 当 | | 存 | し | 置 | 、 | で |
| え | で | る | と | | 在 | し | く | 高 | は |
| ら | は | 人 | 得 | | し | た | 人 | 市 | な |
| れ | な | 々 | て | | た | の | 々 | 麻 | い |
| | く | は | ほ | | の | 如 | が | 呂 | か |
| | 、 | 、 | 言 | | く | 存 | 存 | の | と |

（ま）

（い）

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---------|---|---|
| た | に | る | | 立 | こ | 徳 | と | | る |
| る | っ | 。 | 三 | っ | の | と | き | た | か |
| 地 | い | し | 輪 | て | こ | す | 、 | し | さ |
| 歩 | て | か | 高 | い | と | る | 高 | か | で |
| を | 大 | も | 市 | た | は | 考 | 市 | に | あ |
| 得 | 功 | 、 | 麻 | こ | 、 | え | 麻 | 、 | る |
| た | を | 彼 | 呂 | と | 彼 | か | 呂 | 持 | |
| 官 | あ | は | は | を | が | さ | は | 統 | |
| 人 | げ | 、 | 、 | 意 | そ | 距 | 、 | 女 | |
| で | 、 | 壬 | 南 | 味 | の | 離 | アキツカミたる | 帝 | |
| あ | そ | 申 | 大 | し | 考 | を | 天 | に | |
| る | 水 | の | 和 | て | え | 置 | 皇 | 対 | |
| 。 | に | 内 | の | り | を | い | へ | し | |
| そ | よ | 乱 | 旧 | る | 否 | て | の | て | |
| の | 、 | の | 氏 | わ | 定 | い | 没 | 諫 | |
| 出 | て | 際 | 族 | け | す | た | 我 | 争 | |
| 自 | 朝 | に | の | で | る | 。 | 的 | に | |
| と | 廷 | 天 | 出 | は | 立 | た | 献 | 及 | |
| 天 | に | 武 | で | な | 場 | が | 身 | ん | |
| 武 | 確 | 例 | あ | い | に | 、 | さ | た | |

| | | | | | | | | | |
|---------------------|------|-------------------|------------------|----------------------|------------------------|---------------------|------------------------|----------------------|----------------------|
| 持統朝のころの多くの貴族・官僚たちと同 | は疑えな | 皇室の尊厳を無みするものではないか | ている点から見て、彼の思想が天皇 | 十七日に再び朝に登用され、長門守を拝命し | 辞したものの、文武朝の大室ニ（七〇二）年正月 | 考えられる。諫争の結果、いつてんは官を | への献身と美徳とする意識を欠いて、天皇・皇室 | 天皇・皇室に対する崇敬の念や、天皇・皇室 | ・持統に対する関係に着目するばかり、彼が |
|---------------------|------|-------------------|------------------|----------------------|------------------------|---------------------|------------------------|----------------------|----------------------|

様に、高市麻呂もまた、天皇、皇室に対する
 崇敬の念や、天皇、皇室への献身と美徳と観
 ずる意識をもつていたに相違ない。南大和の
 旧族の出であるとともに壬申の乱の功臣でも
 ある彼は、アキツカミ思想や万世一系の思想
 と最も積極的に鼓吹・宣揚した官人の一人で
 はなかつたか、とさえ考えられる。したがっ
 て、彼が幸福主義的倫理観を重視する立場に立
 っていたということは、彼が政治的倫理観に對して否定
 的な次女勲力をとっていたことを意味するわけではないと言えよう。

彼の幸福主義的倫理観に重きを置いてということは、彼がその『フ
の倫理観』を

西立させようとする意図していたことは、こゝを意味して
いるように思われる。

高市麻呂に共感させた人々も、彼が天皇

や皇室の尊厳を無みしたと見て、そのことに

対して喝采をおくっていたわけではなかつた。

藤原麻呂が、懐風藻所載の「神綱言が墟を過

ぐ」と題する詠の中で、高市麻呂を屈原に擬

ぶえつ ① その忠貞を称えている点から推察する

に、人々が高市麻呂に奉じた共感は、彼を真

の忠臣と見る認識を伴つていたと考えられる。
 すなわち、高市麻呂の思想や言動は、天皇（
 持統）への真の忠誠心に基づくものであつた
 にもかかわらず、ついに天皇の受け容れると
 ころとはなりえなかつたといふ認識に立つて
 高市麻呂と同時代、もしくはそれより早くた
 るころの貴族・官僚たちは、彼に対して共感や
 同情を寄せたものと推察される。
 要するに、高市麻呂も、そして、彼に共感
 や同情を寄せた人々も、衆庶の日常生活の良

好な運行を願う一方で、天皇・皇室への忠誠
 にも重きを置いていたと言えよう。したが
 て、持統朝のころの貴族・官僚たちが、その
 倫理観に関して、もっぱら幸福主義的なそれ
 を奉ずる一団と、主に政治的なそれに立脚す
 る一団とに二分されていったという見方は、成
 立し難いと言わなければならぬ。

古代の貴族・官僚たちの中には、政治
 的倫理観と幸福主義的倫理観と
 を二つながら同時に奉じていたものが多数い

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| の | 権 | ズ | ッ | す | ス | て | 合 | の | た |
| 倫 | 威 | ム | て | こ | 、 | 、 | に | 名 | に |
| 理 | の | が | や | と | そ | 矛 | は | の | 違 |
| 観 | き | 政 | く | は | の | 盾 | 、 | も | い |
| は | と | 治 | か | 、 | 場 | た | ニ | と | な |
| 矛 | に | の | さ | 衆 | 合 | く | フ | に | い |
| 盾 | 苛 | 場 | で | 庶 | に | 両 | の | 政 | 。 |
| な | 斂 | か | あ | に | は | 立 | 倫 | 治 | 儒 |
| し | 誅 | ら | る | 慈 | 、 | し | 理 | の | 教 |
| に | 求 | 退 | 。 | 恵 | 天 | え | 観 | 表 | 的 |
| は | が | け | と | を | 皇 | た | は | 面 | パ |
| 両 | 行 | ら | こ | 施 | ・ | に | 、 | に | タ |
| 立 | わ | れ | ろ | す | 皇 | 相 | 彼 | 押 | ナ |
| し | れ | 、 | が | こ | 室 | 違 | ら | し | リ |
| え | る | 天 | 、 | と | に | な | の | 立 | ズ |
| な | と | 皇 | バ | に | も | い | 内 | て | ム |
| く | き | ・ | ク | に | フ | 。 | 面 | ら | が |
| な | 、 | 皇 | 一 | も | な | な | に | れ | 天 |
| る | ニ | 室 | ナ | つ | ぜ | な | お | る | 皇 |
| 。 | フ | の | リ | な | な | な | い | 場 | |

| | | | | | | | | | |
|--|--|---|--|---|---|---|--|--|---|
| な る。 パ タ ー ナ リ ズ ム が 退 け ら れ、 衆 庶 に 過 | と い う 困 難 な 問 題 に 迫 ら れ、 苦 慮 す る こ と に | ふ べ き か へ い ず れ に 基 づ い て 行 為 す べ き か | な つ た と き、 ひ と は、 二 つ の う ち い ず れ を 選 | 自 ら が 奉 ず る 二 つ の 倫 理 観 が 両 立 し え な く | な が つ て し ま う か ら ず で あ る。 。 | と は 天 皇 ・ 皇 室 の 権 威 を 蔑 ろ す に す る こ と に つ | 意 味 し、 ま た、 衆 庶 の 幸 福 を 守 る う と す る こ | を 尽 く す こ と は 衆 庶 の 幸 福 を 阻 害 す る こ と を | な せ な ら ず、 そ の 場 合 に は、 天 皇 ・ 皇 室 に 忠 誠 |
|--|--|---|--|---|---|---|--|--|---|

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ま | の | 古 | と | は | の | 観 | の | れ | 酷 |
| の | 諫 | 代 | で | は | せ | と | 内 | え | な |
| ぶ | 争 | の | あ | 、 | め | が | 面 | 目 | 負 |
| あ | に | の | ろ | 彼 | き | が | で | の | 担 |
| っ | 言 | 諸 | う | ら | 合 | せ | は | の | が |
| た | 及 | 文 | 。 | の | い | め | 、 | あ | 課 |
| こ | す | 献 | | 内 | 、 | き | 政 | た | せ |
| と | る | は | | 面 | す | 合 | 治 | リ | ら |
| え | 際 | は | | に | な | っ | 的 | に | れ |
| 強 | 、 | 、 | | 選 | あ | た | 倫 | し | よ |
| 調 | 彼 | 高 | | 扱 | ろ | に | 理 | た | う |
| し | の | 市 | | の | 二 | 違 | 観 | 古 | と |
| よ | 言 | 麻 | | 苦 | つ | い | と | 代 | し |
| う | 動 | 呂 | | 悩 | の | な | 幸 | の | て |
| と | が | の | | ま | 倫 | い | 福 | 責 | い |
| し | 、 | 女 | | せ | 理 | 。 | 主 | 族 | る |
| て | 敢 | 帝 | | し | 観 | そ | 義 | ・ | と |
| い | 然 | へ | | め | の | し | 的 | 官 | き |
| | た | | | め | 相 | て | 倫 | 僚 | 、 |
| | る | | | に | 剋 | 、 | 理 | た | そ |
| | | | | | | そ | | ら | |

| | | | | | | | | | |
|---------------------|-----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|-----------------------|----------------------|
| 相違ない。幸福主義的倫理観に立脚して王 | ことには、けつして容易なことではなかつたに | 麻呂にとつて、天皇の命への不服を表明する | 誠に大きな価値をみとめていたであらう高市 | や万世一系の思想を奉い、天皇・皇室への忠 | を示してゐるわけではない。アキツカミ思想 | 面に何のためらいも苦惱も生じなかつたこと | 然たるものであつたにしろ、それが、彼の内 | 倫理観に基づく高市麻呂の言動が、いかにも敢 | るように見受けられる。しかし、幸福主義的 |
|---------------------|-----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|-----------------------|----------------------|

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 高 | 主 | た | 高 | と | が | に | ア | の | 者 |
| く | 義 | ち | 市 | 推 | 激 | お | る | 結 | に |
| 評 | 的 | の | 麻 | 察 | し | い | 考 | 果 | 対 |
| 価 | 倫 | 場 | 呂 | し | く | て | え | 、 | し |
| し | 理 | 合 | に | う | せ | 、 | か | 天 | て |
| て | 観 | も | ひ | る | め | 高 | ら | 皇 | バ |
| い | 五 | 、 | そ | 。 | ぎ | 市 | 距 | ・ | タ |
| た | 基 | 同 | か | | 合 | 麻 | 離 | 皇 | ー |
| と | 調 | 様 | な | | っ | 呂 | 五 | 室 | ア |
| 考 | と | で | 共 | | て | の | 置 | へ | リ |
| え | す | あ | 感 | | い | 内 | い | の | ズ |
| ら | る | ろ | を | | た | 面 | て | 没 | ム |
| 水 | 高 | う | を | | の | で | し | 我 | の |
| る | 市 | 。 | 寄 | | こ | は | ま | 的 | 遵 |
| 。 | 麻 | 彼 | せ | | は | ニ | う | 献 | 守 |
| だ | 呂 | ら | た | | な | つ | ま | 身 | を |
| が | の | は | 同 | | か | の | ま | を | 途 |
| 、 | 言 | 、 | 時 | | っ | 倫 | で | 美 | し |
| 彼 | 動 | 幸 | 代 | | た | 理 | の | 徳 | 、 |
| ら | を | 福 | 人 | | か | 観 | 過 | と | そ |
| | | | | | い | | 程 | | |

共感者たは、天皇・皇室への献段本句身と美德と
 する政治的倫理観を捨てることにはできなかつ
 た。彼もまた、選抜の苦悩に直面していた
 に違いない。高市麻呂の諫争が、結局は王者
 と官僚のあつきの確執にのみとどまっていま
 った。事実には、
 彼ら共感者たちが、ニフの倫理観のあいたに
 在ゆないながさ、いかれも選ぶことができ
 ず、ひたすら沈黙を守つていたことと、如
 実
 に示してゐる。

注

(一) たゞえは、論語(子罕也篇)によれば、如能博

施^二於^一民、而能濟^レ衆者、何如。と子貢が問

うたところ、孔子は、「何事^二於^一仁、必也聖

乎。堯愛其猶病^レ諸。……」と答えたとい

孔子は、博く民に施して能く衆を濟^スうこ

この困難さを説いてはいけるけれども、彼

がそれを理想と看做していることは疑

え

| | | | | | | | | | |
|---|---------------------------------|---|---|--|---|--------------------------------------|---|--|--|
| 傾 門 車 馬 疎 | 清 夜 琴 樽 罷 | 容 暉 寂 旧 墟 | 松 竹 含 春 彩 | 千 年 奉 諫 余 | 一 旦 辭 榮 去 | (3) こ の 詩 は | 細 は 、 別 稿 に 譲 り て い 。 | 性 が あ る 。 し か し 、 こ の 点 に つ い て の 詳 | 仏 教 の 慈 悲 の 思 想 に も 基 づ い て い た 可 能 |
| 傾 門 車 馬 疎 <small>あふ</small> し 。 | 清 夜 琴 樽 罷 み 、 | 容 <small>よ</small> 暉 <small>き</small> 旧 墟 に 寂 <small>さび</small> し 。 | 松 竹 春 彩 を 含 <small>ふ</small> み 、 | 千 年 諫 を 奉 り し 余 に 。 | 一 旦 榮 を 辞 び て 去 り ぬ 、 | こ の 通 り で あ る 。 | | | |

将得水魚歛

将に水魚の歛を得む。

(同九六)

(4)

持統朝初期の太政官の要職は、右大

臣丹比真人嶋比とりを別とし、他はナ

べて壬申の乱の殊勲者たちによつて占め

らぬていた。北山茂夫氏は、それらの功

臣たちから、高市麻呂の諫争を暗黙のうちに

にまえていたのではなかつたか、と推測

してゐる。(『日本古代政治史の研究』一六九

ページ)。

(5) 都城の造営が一時にナベテ完了した

とほ考えられなけれども、いさおう本

稿においては、女帝遷居の日（持統八年

十二月六日）を以て、造営事業がおおむ

ね完了した日と看做しておく。

(6) 書紀によれば、高市麻呂は、天武元

年六月二十九日に將軍大伴吹負の軍に加

わり、七月某日には、置始連菟ととも

着陵で近江方の軍を撃破したといふ。

(7) 詩の中に、沈吟佩楚蘭、といふ句が

見える（本書注（3）参照）。作者は、この
句を以て、高市麻呂の行動と屈原の故事
に擬している（岩波日本古典文学大系 日
懐風藻・文華秀麗集・本朝文料 一五九八
一六〇〇頭注参照）。